

日本にはこんな酒しかないのかな、情けねえなあ、と思つたの。

私は二代目なんですよ。まあ親父が最初なんですけれどもね。戦前は味噌とか醤油が専門だった。酒屋として免許をとつたのは、戦後になって、昭和三〇年ごろだろうな。それからだね。

大学のころは体育会だったから、よく飲んでましたね。でもうまくないわけ、酒がまずくてさあ。それもまずいだけじゃなくて、体の具合も悪くなる。なんでこんなうまくない酒っていうものを、うちは商売にしてるんだってずっと思つた。日本にはこんな酒しかないのかな、情けねえなあ、と思つたの。自分の家業だから親に面と向かつては言えないんだけど、ずっとそう思つた。そんなことはないだろう、もつといろんなところに、おいしい酒がいっぱいあるんじゃないかな、と思つたのが酒屋を継ぐことに決めたまきっかけで。

それからひとつひとつ、たとえば新潟や山形なんかの蔵元に行つてみるようになった。

いろんなところに飲みに行くときもあるじゃない。すると全然知らない酒をまず飲んでみて、おいしかったらその蔵に行つてみて、それでお話しさせていただく。やっぱり人柄って酒に出るから。そこで気持ちがあえば取り引きをお願いしたり、ということはしてましたね。

だからやっぱり、自信を持って売ることができる、っていうことが自分の中では基本だつたと思います。そうやっていたら自然と、日本酒と焼酎とかっていう、横文字じゃないものが多くなつていった。「わかる」っていうことを一番大切にしてきたから。

まずいと思つたものを売ってっていうのは詐欺だもん。自分の気持ちの中でね。嗜好品だから、自分がこれはおいしくないなと思つていても、「こんなうまい酒はじめて飲んで」って思う人もいるかもしれない。でもそれは「助かった」っていう気持ちだよ。そういう評価もあるんだ、っていうことを再認識はするけれど、一〇人に飲ませたらみんながどう思うかはわからない。だからまずは自分で自信を持てるかどうかですよ。あとはその人の好みの問題であつて。お客さんがイニシアチブを持つてるわけだから。

僕はよく言うんだけど、騙されたと思つて買つてくださいって。それでいいんですよ。知らないものは騙されたと思うしかないんだから。わかつてて買うのはいつも飲んでるやつですよ。そうじゃなくて、はじめて飲む酒っていうのはわからないから、それを口

頭で説明して、僕はできるだけ伝えるようにする。

酒質データとかあるじゃない。精米具合が五〇%で、酒米は山田錦を使って、って。でもこんなの伝える必要ないんだよね。飲む人は理科の実験やってるんじゃないんだから。たとえばデパートで試飲して、「これはどんなお酒ですか」って聞くと、「これは日本酒度が十二・五で、精米が何%で、だから辛口です。」なんて言う。馬鹿言ってるんじゃない。アミノ酸の数値とか酸の数値とかも教えるよって、バランスつてものがあるだろ。と。じゃあ、十三の酒が一〇本あれば全部おなじ味なのかっていう話ですよ。そしたら一〇本いらねえじゃねえか、一種類でいいじゃねえか、つてことになる。そうじゃないところが酒なわけで。

日本酒度とかつてあるじゃない、あれつてメーターなんだけどね、釣りの浮きみたいなのもなんですよ。それを酒の中に入れるだけの話。そうするとね、それがいつも一定の位置で止まってるかって言うと、ありえねえんだよね。二のときも三のときもあるわけで、じゃあ二・五にしましょう、つてだけなんだから。そんなもんなんですよ。だから、頭で考えて酒を飲むじゃなくて、やっぱり鼻で嗅いで、舌で味わうつてのが大事。飲んでみないとわかんない。だからそういう数字のことも知識としては持つてもいいかもしれないけど、この酒はちよつと温めたらうまいだろうな、とか、この酒なら湯豆腐

で一杯やりてえな、とか、そういった楽しみ方を、もっと知ってもらいたいね。

ただ売り上げをのぼすことだけを目標としてないんですよ。

僕が仕事をやりはじめたころ、大体入ってくる酒っていうのは灘、伏見の大手の蔵のものが多かったですよ。いまでもそういう酒蔵は営業も販売もしてらっしゃるけど、その当時はそういうものがとりわけ強かった。だから地方の酒がこちちまで入ってくることはなかなかなかった。「菊正宗」、「月桂冠」、「白雪」なんてのが日本酒というものであったわけです。これはもう日本の歴史としてはしょうがないよね。ただやっぱり、僕よりも上の年代の方は、それをあたりまえだと思っていた時代だから。当然戦争も経験されて、たいへんなご苦労されたわけじゃない。そんなときに贅沢は言えないよね。これがうまいだの、辛口だの甘口だのなんのって、そんなことは言えない。酒が飲めるっていうことが、それだけで素晴らしいことだったと思うんですよ。

免許っていうのはいまも細々と形の上では残っているけど、あつてないようなものじゃないですか。でもね、昔ながらの酒屋っていうのは、既得権とまでは言わないけれど、